

**1. 本発表の論点**

**(論点 1)** 先行研究では「つ」は場所や位置を表す語(または拘束形態素, 以下「語」とまとめる)につく属格とされているが, 本発表では, 万葉集における「つ」の使用例の検証, 属格の変化に見られる方言間の共通性などを検証し, 「つ」の用法は場所や位置などに限定されることなく, (方言性は高いかもしれないが) 上代の頃の日本語では広く一般的に使われていたと主張する。

**(論点 2)** 「ひとつ, ふたつ, みつ …」などの数詞の接尾辞である「-つ」が, 属格「つ」から発生した可能性について検証し, その可能性が高いことを示す。

**2. 上代の属格「つ」に関する先行研究**

◆ 上代日本語の代表的な属格には「の」・「が」・「つ」の3つがあるが, 確認できる「つ」の使用例は「の/が」と比べて少ない。

(1) 「つ」の先行語として使用例が多いもの, 目を引くもの (万葉集の歌番号を「万 xxx」と記す)  
天つ神 (万 904 他); 沖つ島 (万 4103 他); 上つ瀬 (万 38 他); 国つ神 (万 904 他);  
下つ瀬 (万 38 他); 中つ枝 (万 3239); 辺つ波 (万 931); 山つみ (万 38); わたつみ (万 3597 他)

このような例から, 先行研究では「つ」は場所や位置を表す語につく属格としてしていることが多い (Murayama 1957, Miller 1971; 大野晋ほか 1974, Itabashi 1987 など)。大野透 (1978)は, 上記のような例の中でも対比関係にある用法から, [XつY]は[グループYの中のX]という関係を表しているとしている (天つ神 vs.国つ神; 上つ瀬 vs.下つ瀬; 山つみ vs.わたつみ 等)。しかし, これらの主張は「つ」の使用例の一部に基づいたものであり, 「つ」の用法の全体像を捉えているとは言い難い。

**3. 万葉集における属格「つ」の多角的・包括的検証**

以下の4点から, 上代の頃の属格「つ」の用法は場所や位置などに限定されることなく, (方言性は高いかもしれないが) 広く一般的に使われていたと考えられる。

(注: Hirata (2001)の Appendix B に万葉集における属格「つ」の全(異なり)使用例を載せている。)

### 3.1 場所や位置を表す語につく場合と同様、それ以外の語につく例も多い。

(2) 場所や位置を表す先行語 (甲乙の区別は示さない。括弧内は意味で現代漢字。)

あま(天); いへ(家); うみ(海); おき(沖); おく(奥); かみ(上); くに(国); くに(恭仁);  
さき(先); しま(島); しも(下); と(外), なか(中); には(庭); の(野); へ(辺); むか(向);  
やま(山); わた(海); をと(遠い場所を示す)

(3) 場所や位置ではない先行語

いほ(500); しこ(愚); たなばた(織機); たま(宝石); とき(時); ところ(永遠の語根);  
とほ(遠いの語根); はな(花); ほ(突端); みけ(御食); みを(水, 流れ); もと(元, 過去);  
もも(100); ゆ(神聖な)

◆上記の例より、「つ」は場所・位置に特化された属格とは言えない。

### 3.2 「つ」と「の」が同じ先行語を受ける場合もある。

- |                               |     |                            |
|-------------------------------|-----|----------------------------|
| (4) a. あま.つ.しるし (天の川, 万 2007) | vs. | あま.の.がは (万 3658)           |
| b. くに.つ.かみ乙 (国つ神, 万 904)      | vs. | くに.の.かみ甲 (国の上[領主], 万 3098) |
| c. しこ.つ.おきな (愚かな翁, 万 4011)    | vs. | しこ.の.みたて (粗末な御盾, 万 4373)   |
| d. とほ.つ.くに (別の世界, 万 1804)     | vs. | とほ.の.くに (韓など遠い国, 万 3688)   |
| e. わた.つ.み (海の神, 万 3597 等)     | vs. | わた.の.そこ (海の底, 万 1223 等)    |

◆「の」と「が」については尊卑(尊には一般的なものも含む)の対立により、相補分布的な使い分けがあったと考えられるが、上記の「つ」と「の」の使用例を見ると、「つ」と「の」の間に明確な使い分けがあったとは言えない。「の」は上代においても一番一般的に使われていた属格である。

### 3.3 「つ」は名詞性拘束形態素を受け、形容詞的用法になる場合がある。

- |                                |                            |
|--------------------------------|----------------------------|
| (5) a. しこ.つ.おきな (愚かな翁, 万 4011) | b. ところ.つ.みかど (永遠の帝, 万 174) |
| c. とほ.つ.かむ.おや (古の先祖, 万 4096 等) | d. ほ.つ.たか (優れた鷹, 万 4011)   |
| e. ゆ.つ.いはむら (神聖な岩群, 万 22)      |                            |

◆下に示すように、「の」も全く同様の用法がある。

- |                                 |                               |
|---------------------------------|-------------------------------|
| (6) a. しこ.の.みたて (粗末な御盾, 万 4373) | b. しこ.の.しこ.くさ (煩わしい草, 万 3062) |
| c. とほ.の.くに (韓など遠い国, 万 3688)     | d. とほ.の.みかど (遠い朝廷, 万 3688 など) |

◆属格を使わずに、上記の名詞性拘束形態素が使われる場合もある。

- (7) a. しこ.や (粗末な屋, 万 3270)      b. しこ.ほととぎす (愚かなホトトギス, 万 1507)  
c. ところ.は (永遠に緑の葉, 万 3436 等)      d. とほ.づま (遠い地にいる妻, 万 1294 等)  
e. とほ.と (遠い音, 万 531 等)      f. もと.へ (元の側, 万 3222)  
g. ゆ.ささ (神聖な笹, 万 2336)      h. ゆ.たね (神聖な種, 万 1110)

◆上記の例からも、「つ」は場所・位置に特化された属格とは言えない。むしろ、「の」と共に、語根とその派生形に関する文法を構成する重要な要素であったと考えられる。

### 3.4 「つ」は前後要素をかなり複雑な意味関係でつなぐ場合がある。

- (8) a. はな.つ.づま (花のように美しい妻, 万 3370)  
b. あま.つ.そら なり (空虚である, 万 2887)  
c. みけ.つ.くに (食物を納める国, 万 933)      d. たなばた.つ.め (織物をする女, 万 2027)

◆「の」にも同様の用法がある。

- (9) a. つゆ.の.いのち (露のようにはかない命, 万 3933)  
b. わかくさ.の.つま (若草のような妻, 万 4331)  
c. や.つか.ほ.の いかし.ほ (八束穂の厳し穂, 祝詞)  
d. うわ.の.空 (平安以降)

◆(8a)(9a,b)は属格の使用で比喩表現になっている例, (8b)(9c,d)は同等語の並立, そして(8c,d)も典型的な属格の用法とは言えない。このような複雑な用法は、属格としてよりシンプルで基本的な用法がたくさん使われる中で派生したものであると考えられ、「の」と同じように「つ」は広く一般的に使われていたと推測できる。

## 4. 方言における属格の歴史的変化

標準語、福岡県の方言、富山県の方言を比較すると、以下のように属格「の」「が」「つ」がそれぞれ同様の変化を遂げたことが分かる。特に福岡では「つ」が標準語の「の」と同様の変化を遂げており、属格「つ」の用法は場所や位置などに限定的でなかったと考えられる。

(注：方言データは、国立国語研究所 (1989), 平山 (1997, 1998), Martin (1975), および個人的な informant によるものである。)

(10) 方言間で同様に見られる属格の歴史的変化

	属格	主格	代名詞的属格 (俺ノ)	形式名詞 (長いノ)	名詞化辞 (重いノに,)	終助詞的用法 (何してるノ?)
標準語	ノ	ガ	俺ノ	長いノ	重いノに	何してるノ?
福岡	ノ ガ	ノ	俺ント 俺ガツ	長いト 長カツ	重いノに 重カツに	なんしよット?
富山	ノ	ガ	俺ンガ	長いガ	思いガに	何しとんガ?

属格テストフレーズ「先生の/俺の 手拭い」； 主格テスト文「泥棒が入った/先生が来られた」；  
別の名詞化辞テスト文「行くのに便利だ」

(11) 同様の属格の変化は他言語でも起こっている。

a. 英語の所有代名詞の発生は 14 世紀の Middle English に遡る(Onions 1966; Barnhart 1988)。

[yours → yours]; [hires/hiris/hirs → hers]; [urs/oures/ours → ours]; [thairs → theirs]

b. イギリス南部方言では -s ではなく, -n が同様の変化を遂げた。

(mine; thine in ME) → 'hern; hisn; ourn'

c. head noun の省略と形容詞的用法 (google 検索フレーズと商品上のコピーフレーズ)

It is not [Φ] of our concern.; not of my age; not of my cup of tea; not of my knowledge

Kindly remember, the ridiculous hype that offends so many is not of my making. (商品書き)

d. 中国語の「的」

是我的书 (私の本です); 这是我的 (これは私のです); 你什么时候来的 (あなたはいつ来たの?)

◆まとめ：ここまで確認してきた万葉集のデータ，そして方言での属格の変化をもとに考えると，属格「つ」の用法は場所や位置などに限定されることなく，(方言性は高いかもしれないが) 上代の頃の日本語では広く一般的に使われていたと考えられる。

## 5. 数詞の接尾辞「-つ」についての仮説；属格「つ」から派生した可能性

ここからは、「ひとつ、ふたつ、みつ …」などの数詞の接尾辞である「-つ」が、属格「つ」から発生した可能性について検証し、その可能性が高いことを示す。

### (12) 数詞の基本的な用法

#### a. 「Xつ」の形で自由形態素として使われる

ひとつ (e.g. 我が身 ひとつ は, 万 2691); ふたつ (e.g. ふたつ なし, 万 412); みつ; …

#### b. 「-つ」なしで拘束形態素として使われる

ひと- (e.g. ひとへ, 万 2520; ひととせ, 万 2218); ふた- (e.g. ふたよ[二つの人生], 万 1410)  
み- (e.g. みとせ, 万 1740); よ- …

◆大野晋ほか(1974)は、数詞の「-つ」と「はた.ち(伊勢物語)」や「いほ.ち(500, 万 4101)」の「-ち」は同じ要素から派生したとしているが、データに基づいた主張ではなく、それ以上の議論はない。Martin (1987)は、数詞の「-つ」は属格の「-つ」からきているとしているが、詳しい議論はない。

### (13) 「つ」が数詞の中で属格として機能していることが確認できる例（直接、名詞が後接している）

#### a. ひとつ.まつ (1本の[寂しい]松, 万 1042)

#### b. みつ.あひ (3本の糸から編んだ糸, 万 516)

#### c. ひとつ.とせ (5年, 万 880);

(cf. いほ- [5-100-] in OJ; いそ- [5-10-] in EMJ, や.そ- [8-10] in OJ.

これらから、「い-」が5を表す拘束形態素であることが分かる。)

#### d. ひとつ.つ [5-GEN-one] (5の物, 仏足石歌 19)

(cf. 属格とその派生名詞要素の二重使用は、「俺.が.つ/俺.ん.と/俺.ん.が」[I GEN one]という福岡や富山方言、そして、'your-s/their-s'などの英語表現にも見られる。

#### e. いほ.つ.とり (500→たくさんの鳥, 万 4011); いほ.つ.つどひ (たくさんの玉, 万 4105);

いほ.つ.つな (たくさんの綱, 万 4274)

#### f. もも.つ.しま (たくさんの島, 万 3364) cf. もも.な.ひと (たくさんの人, 書紀 歌 11)

◆「-つ」なしで拘束形態素だけで使用している(12b)の例、および、属格として「つ」を使用している(13)の例を見ると、「-つ」という要素は数詞に絶対的に必要だったものではなく、(5)(6)(7)の形容詞的使用例で見たように、属格として語構成の文法の一部を担っていたと考えられる。

属格の後続要素(またはフレーズの主要部)を省略するという用法は、セクション4で検証した方言間

の共通のプロセスでも確認できるものであり、英語や中国語でも確認できる。[拘束数詞-つ-名詞]という形から名詞が脱落する用法が発生し、「-つ」が「～のもの」という形式名詞的な意味まで担うようになる変化は十分考えられる。

◆例の(13b)で示したように、「い.つ.つ」のように属格とその派生名詞要素の二重使用が確認できるのは、数詞の中の「-つ」が属格から派生したという考えの有力な根拠の1つとなる。以下の例で確認できるように、属格の変化の中で二重使用はよく見られる現象である。

#### (14) 属格とその派生名詞要素の二重使用の例

- a. 英語の所有代名詞 your-s [you(GEN)-one]; our-s [we(GEN)-one]
- b. イギリス南部方言の所有代名詞 our-n [we(GEN)-one]; her-n [she(GEN)-one] modeling
- c. 英語の二重表現 friend of mine; a great country of ours
- d. 口語ドイツ語の所有代名詞表現 sein(e)-s [he(GEN)-one], as in  
Das ist (dem) Peter sein(e)s [that is the(DAT) Peter(DAT) his.one] 'That is Peter's'
- e. い.つ.つ [5-GEN-one] (5の物, 仏足石歌 19)
- f. わ.が.の [I GEN one] '私のもの, 妻' (平安時代の曾丹集)
- g. 俺.ん.と (北部福岡); 俺.が.つ (南部福岡); 俺.が.の (東部福岡); 俺.ん.が (富山)
- h. 俺のん (? 関西圏 < 俺.の.の [I GEN one] or 俺のお [I GEN ] 長音化?)
- i. 赤い.の.の.右 [red one GEN right] 標準語
- j. ふた.つ.の.うみ [two-one GEN sea] (万 3849); よ.つ.の.ふね [four-one GEN ship] (万 4264)

◆まとめ：以上のようなデータをもとに考えると、数詞の接尾辞「-つ」については、拘束形態素を属格「つ」が受ける用法、すなわち、[拘束数詞-つ-名詞]という用法から、その後続の名詞を省略する形が使われるようになり、「-つ」が形式名詞状態の接尾辞に変化したと考えられる。

【参照文献】 Barnhart, Robert K. (ed.) (1988) The Barnhart dictionary of etymology. The H. W. Wilson Company./ Hirata, Yu. (2001) Historical changes of genitive particles in Japanese: Specific issues and broader implications. Ph.D. dissertation, The Ohio State University./ Itabashi, Yoshizo. (1987) Altaic evidence for the Japanese and Korean case suffix system. Ph.D. dissertation, University of Washington./ Martin, Samuel E. (1975) A reference grammar of Japanese. New Haven: Yale University Press./ Martin, Samuel E. (1987) The Japanese language through time. New Haven: Yale University Press./ Miller, Roy Andrew. (1971) Japanese and the other Altaic languages. Chicago: University of Chicago Press./ Murayama, Shichiro. (1957) 'Vergleichende Betrachtung der Kasus-Suffixe im Altjapanischen.' In Studia Altaica, 126-31. Wiesbaden: Otto Harrassowitz./ Onions, C. T. (ed.) (1966) The Oxford dictionary of English etymology. Oxford: Oxford University Press./ 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎 (編) (1974) 『岩波古語辞典』岩波書店./ 大野透 (1978) 『日本語の溯源的研究』高山本店./ 国立国語研究所 (1989) 『方言文法全国地図 (1)』大蔵省./ 平山輝男 (編) (1997) 『福岡県のことば (日本のことばシリーズ 40)』明治書院./ 平山輝男 (編) (1998) 『富山県のことば (日本のことばシリーズ 16)』明治書院.